

『2021 年版 鼠径部ヘルニア分類(新 JHS 分類)』運用のお願い

■ はじめに

謹啓、時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

日本ヘルニア学会(JHS)は、2006 年 4 月、独自の 2006 年版 鼠径部ヘルニア分類(旧JHS 分類)を提唱し、以来、外科学会会員の皆様の実臨床に役立つよう情報を発信してまいりました。当時はまだ国際的に統一された分類がなかったこと、また腹腔鏡下修復術にも対応可能な新分類の策定が急務であったことを鑑みて、わが国初の分類をJHS から発信した経緯がございます。

しかしながら、2018 年、HerniaSurge Group から発表された International guidelines for groin hernia management(文献)の中で、鼠径部ヘルニア分類として European Hernia Society の分類(EHS 分類)を推奨するとの記載がありました。本ガイドラインはヨーロッパ、アメリカ、アフリカ-中東、オーストラリア、そして我が国が所属するアジアパシフィックの各ヘルニア学会による 合意として、世界 19 カ国から 50 人の専門家が参加して作成した初めての国際基準です。その中で、推奨度は高くはない(low)ものの、全世界に多数存在する鼠径部ヘルニア分類の中で EHS 分類が国際分類として推奨された事実を看過するわけにはいかないとの判断から、JHSの理事会・評議員会で慎重な議論を重ねてまいりました。今後、我が国の外科医、特に若手外科医に研究成果を国際学会や英語論文を通じて遅滞なく世界に発信、あるいは国際的な場で対等の議論を行っていただくためには、基本となる分類法を世界基準と同様にする必要があります。また折しも、2021年から鼠径部ヘルニアに関するNCD への入力項目が増えることになったため、今後ここに蓄積されるデータは世界的に見ても莫大なものになります。将来的にこれを有効活用するためにも、EHS分類に則った形でデータを入力する必要があります。最終的にJHSといたしましても、EHS分類に準じた新分類が必要との結論に至りました。

そこで、今回、旧JHS分類を大幅に改定し、わが国の実臨床に則しながら、国際分類とも互換性を有する「2021 年版 鼠径部ヘルニア分類(新 JHS 分類)」を作成いたしました(資料1)。新JHS分類、国際分類、旧JHS分類の対照表(資料2)を添付いたします。国際分類との違いとして、ヘルニア門径の測定により客観性を持たせるため、『横指』だけでなく従来の『cm』を残しております。次に、将来的な、さらなる分類改定の可能性や学術的価値を鑑みて、特殊型と診断した場合にはその内容を具体的に記すよう求めています。また、再発ヘルニアには必ず(R)とその回数を付記することとし、記載の無いものは初発と判断いたします。『ヘルニアなし』および『不明・確認せず(できず)』の項目は術式や術者の経験によって偏りが出ることが予想され、正確なデータ集積が困難と考えたため、記載を求めないことといたしました。

外科学会会員の皆様方にはこれまで 2006 年版 JHS 分類の臨床応用と普及に関して多岐にわたるご協力・ご支援を頂きましたことに心より感謝しております。以上のような経緯をご理解いただき、今後は新 JHS 分類を広くご活用いただきますようお願い申し上げます。

謹白

文献： International guidelines for groin hernia management. Hernia (2018) 22:1–165

<https://doi.org/10.1007/s10029-017-1668-x>

資料1：「新 JHS 分類(2021)」

資料2：新JHS分類、国際分類、旧JHS分類の対照表

■ 新 JHS 分類の目的

術式選択の基準や術後成績の客観的な比較に用いるとともに、国際分類 [European Hernia Society (EHS) 分類] に準拠することにより、研究成果を遅滞なく世界に発信する。